

<p>テーマ</p>	<p><b>授業 UD における視覚化の技法 2</b> ～デザインのアプローチによる認知負荷の軽減～</p>
<p>発表者 (所属)</p>	<p><b>池田 努</b> (山形県立庄内総合高等学校   通信制の課程)</p>
<p><b>【発表概要】</b></p> <p>前回の全国大会では、「授業 UD における視覚化の技法 1 ～デザインのアプローチによる認知負荷の軽減～」というテーマで発表した。学びのユニバーサルデザインにおいては、教科教育や特別支援教育の専門性をベースとした授業設計や環境設計としての側面がやや強く、その基盤となる視覚化についてのテクニカルな部分はあまり語られてこなかった点を指摘した。そして視覚化の効果的な方法は、どのようなマインド、プロセス、テクニックでアプローチすればよいかを「デザイン」の視点から具体例をあげながら提示した。そこでは視覚化を「視認性（見やすい）」、「可読性（読みやすい）」、「判読性（わかりやすい）」という3つの側面から捉え、「情報の外側」を整理するという視点から、「視認性」と「可読性」を中心に説明した。また、デザインは感覚やセンスといった曖昧なものではなく、文字の配置や色の選択には明確な理由が存在し言語化できること、知識として積み重ねることもスキルとして身につけることもできることを説明した。</p> <p>今回は前回の内容に加え、「情報の内側」を整理するという視点で「判読性」を中心に説明したい。こうした配慮により児童・生徒の認知負荷が軽減されること、そしてデザイン行為は単なる装飾することではなく、明確な目的のもと、情報を整理（構造化）し、適切に配置（レイアウト）するという一連の設計やプロセスであることを示したい。</p> <p>これらの視点は米国の CAST（Center for Applied Special Technology）における『学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン』3原則、「I 提示のための多様な方法の提供」で示されている「情報の表し方をカスタマイズする多様な方法を提供する」、「言語、数式、記号のためのオプションを提供する」、「語彙や記号をわかりやすく説明する」、「構文や構造をわかりやすく説明する」、「文や数式や記号の読み下し方をサポートする」、「様々なメディアを使って図解する」、「パターン、重要事項、全体像、関係を目立たせる」などに大きく関連するものであると考える。</p> <p>教育活動での ICT 機器活用が推奨され、視覚化の重要性が増している現在、授業 UD の視点から PC 画面（板書）や提示資料の「視認性」、「可読性」、「判読性」をどのように確保するべきかをともに考えていきたい。</p>	